

シンガポールの日本語教育事情 —グローバル人材育成に向けた取り組み—

ウォーカー泉 (シンガポール国立大学)
森川洋子 (シンガポール経営大学)
伊藤晶子 (ナンヤン理工大学ビジネススクール)

1. シンガポールの日本語教育事情

シンガポールは、国土が東京23区程度、人口560万人(2017年6月現在)という小さな都市国家ですが、1965年の建国以来、外国資本を頼りに急成長を遂げてきました。その経済成長に日本も多大に貢献してきたことから、政府によって日本語教育が積極的に推進され、現在でも大学や成績トップ10%の優秀な中高生が放課後に通う教育省語学センターやポリテクニク(高等専門学校)、大学では、毎年1000人規模の日本語教育が行われています。

シンガポールには多くの日系企業がありますが、近年は特に近隣諸国への進出の拠点としてアセアン統括本部が設立されたり、本社機能をシンガポールに移転する企業が増えてきました。そのような日系企業、さらには日本との取引のある地元企業、多国籍企業からも日本語のできる卒業生が求められるようになり、大学では、ビジネスで活躍できる人材の育成、いわゆるビジネス日本語教育の重要性が高まっています。しかしながら、シンガポールでは英語と母語(中国語、ヒンディー語、マレー語)のバイリンガル教育が行われているため、第三言語である日本語は、中等教育では成績優秀者しか学ぶことができない制度となっています。また、大学でも一般教養科目としてしか開講されていないため、大半の学習者が高い日本語レベルに到達できないという問題を抱えています。このような日本語教育の状況を少しでも改善し、さらに発展すべく、日本語教師の有志により2001年にシンガポール日本語教師の会が設立されました。

2. シンガポール日本語教師の会の活動

シンガポール日本語教師の会 (Japanese Language Teachers' Association in Singapore) は、国内外の日本語教育者のネットワーク、日本語教育関係者の知識向上・情報交換を目的として設立されたもので、設立以来、約80名の会員が定期的に集い、日本語教育セミナー、勉強会、フォトコンテストなどを行ってきました。2013年には、国内外の企業からの外国人材の需要に応えるべく、教師の会を中心に、日系企業で働くシンガポール人の日本語使用の実態調査を行い、日本語でのコミュニケーション上の課題などについて検討するワークショップを開催しました(Walker, Ito, Ishihara 2018)。そして、設立15年目にあたる2015年には、ビジネス日本語研究会との共催で「ビジネス日本語教育国際大会⁽¹⁾」を開催しました。シンガポール初の国際大会でしたが、シンガポール日本国大使、シンガポールシニア大臣政務官をはじめとする行政、企業関係者、日本やアセアン諸国の日本語教育代表者、ビジネス日本語教育専門家や日本語教師など、シンガポール国内外から200名近くの方にご参加いただき、多くの知見を得ることができました。さらに、昨年には、「日本語教育国際会議2017」も開催しました。本稿ではこの国際会議とグローバル人材育成に向けた大学での取り組みについて紹介します。

3. シンガポール日本語教育国際会議2017⁽²⁾

2017年11月8日に、「シンガポール日本語教育国際会議2017」が開催されました。本会議は、「日本語教育・学習の意義を再考する～垣根を越えた連携～」というテーマで行われたもので、行政、企業、教育関係者など総勢200余

名が参加し、グローバル人材育成に関する様々な議論が行われました。



シンガポール日本語教育国際会議 2017 開会式

はじめに、全米日本語教育学会元会長の田伏素子教授による「グローバルコンピテンシーと日本語教育・産官学のコラボの試み」をテーマとした基調講演が行われ、アメリカでのビジネス日本語教育事情についてご紹介いただきました。続いて「外国人材育成における日本語教育の意義」をテーマに、教育、企業、卒業生代表6人によるパネルディスカッションが行われました。近年急増している外国人材の需要に応えることが困難であるシンガポールの日本語教育の現状について問題提起がなされた後、日系企業の現状や職場での日本語使用の実際、その重要性や課題について活発な意見交換が行われました。その後、参加者から日系企業に抱いている疑問や不安に対する質問が投げられ、熱論が繰り上げられました。パネリストからのコメントの一部をご紹介します。

- 日系企業は今、グローバル化と同時に自らのブランドバリューを守らなければならないという狭間に置かれていますが、ダイバーシティを求めることで変わろうとしています（ヘンドリック・マイヤーオーレ：シンガポール国立大学・日本研究学科教授）。
- ビジネス界では、今、地元の知識を備え、かつ、日本語ができる人材が、シンガポールその他のアセアン諸国と日本の懸け橋として求められています（石井淳子：ジェットロシンガポール事務所所長）。

- 日系企業において、外国人はマイノリティーであるからこそ、大きな活躍のチャンスがあるのです（松ヶ崎穂波：三井住友銀行アジア・大洋州統括部副部長）。
- ビジネス日本語教育では、言語能力のみならず、グローバル人材に必要とされる問題解決能力や異文化コミュニケーション能力の向上を目指して研究・実践が蓄積されてきています（堀井恵子：武蔵野大学大学院言語文化研究科教授）。
- 日本語ができたおかげで、卒業後は多岐に渡る活躍の場を得ることができました。今は日系企業の過渡期であるからこそ、我々の飛躍のチャンスなのです（リュウ・リー：ナンヤン理工大学卒業生）。
- 日本での生活が自分の視野を大きく広げてくれました。仕事の大半は英語でも日本人同僚との会話や生活を楽しむ上で日本語は必須だと思います（ユードイー・リム：シンガポール国立大学卒業生）。



パネルディスカッション

午後は、beyond global グループ President & CEO である森田英一氏を講師として、「『日本企業で働く』を改めて考える」をテーマに異文化ワークショップが行われました。世界の中でも独特だと言われる日系企業の企業文化（顧客第一主義、勤勉さ、チームワーク重視、時間感覚、品質重視、職人文化等）。その企業文化が戦後の成長を支えたとも言える一方、グローバル展開をする中で、日本人以外の社員には戸惑いを感じるものであることから、企業人、日本語を学ぶ大学生、日本語教師から成る総勢 140

人の参加者がグループに分かれて本音を共有することで、異なる立場の視点を知ることを学びました。「日本語学習者から見て、日系企業はどのような企業文化を持っているように見えるのか」「日系企業で働く日本人から見て、日本人以外の社員はどのように映るのか」を切り口に「相手を否定しない・まず話を聞く」を前提として意見交換をした後、それを踏まえて、改めて日系企業の持つ強み・課題・今後の企業のあり方を考え、グループごとに用紙にまとめて発表しました。そして、日本のチームとしての強さ、品質の高さなどの良い面を保ちつつ、多様性を増し自分と異なる他者を受け入れていくことが大切だといった課題が提出されました。短時間でしたが参加者が各自考え、他の人の意見に耳を傾ける貴重な機会となりました。



異文化ワークショップ

午後の後半に行われたアセアンシンポジウムでは、「日本語教育とグローバル人材育成～教育機関・企業・行政の連携を通して日本語教育の意義を考える～」をテーマに、アセアンの6か国（インドネシア・カンボジア・タイ・ベトナム・マレーシア・シンガポール）の日本語教育機関代表者が会し、各国の日本語教育の経緯と現状、グローバル人材育成のための取り組みや今後の課題について議論しました。近年、日本語教育の発展が目覚ましいアセアン諸国の日本語教育機関において、どのようなミッションのもとに、いかにして企業や行政と連携し、日本語を学ぶ学生達の視野を広げ、スキルを高める手助けを行っているのか、互いに社会背景や理念、実践例を共有し、意見交換する機会となり

ました。行政・企業の方々からも、今後のアセアン地域でのコラボレーションに向けて建設的なご意見・ご感想を頂き、将来の展望にもつながりました。



アセアンシンポジウム

アセアンシンポジウムと同時に、企業と大学生日本語学習者との交流セッションも行われ、16社がブースを設置し、日本語を学んでいる約100名の大学生参加者に企業紹介や情報交換を行いました。



企業と大学生の交流セッション

以上、まさに、行政、企業、教育関係者による垣根を越えた交流、議論を通して、グローバル人材育成に関する現状や課題、日本語教育の意義を再認識できました。また、他のアセアン諸国と共有している課題が多いことも明らかになり、そのような課題に取り組むためには、一層連携を深め、日本語教育がグローバル人材育成にどのように貢献できるのか模索し続けることが大切であると実感できる、貴重な機会とも

なりました。このような大規模な国際会議の開催を支援して下さった在シンガポール日本国大使館、国際交流基金、シンガポール日本人会、シンガポール国立大学、協賛企業には心から感謝しております。なお、このような大会の開催の背景には、高度外国人材の需要が高まっている一方、そのようなニーズに応えることが困難であるというシンガポールの切迫した日本語教育事情がありました。続いて、そのような制約の下で取り組んでいるグローバル人材育成のための活動について、二つの教育機関を例にご紹介します。

4. シンガポール国立大学のビジネス日本語教育

National University of Singapore (シンガポール国立大学) では13の外国語教育が行われていますが、日本語が最も人気が高く、毎年1400名前後の学生が履修しています。毎学期、300名から400名の初級コースが開講され、3年目には「ビジネス日本語」コースが開講されます。このコースでは、プロジェクトを中心としたカリキュラムが開発、実践されてきました。その一つが「企業訪問プロジェクト」です。これは、3、4名のグループに分かれた学生が日系企業を訪問し、日本人社員や卒業生にインタビューをし、そこで学んだことを発表するという活動です。訪問時間は1時間程度ですが、この機会を最大限に生かせるようさまざまな学習が組み込まれています。例えば、「ビジネス会話」では、訪問先へのアポイントの取り方、電話のかけ方、インタビューの仕方などを学び、訪問後は、発表、質疑応答、司会の仕方などを学習します。「ビジネス文書」では、企画書や報告書、企業への依頼・確認メールの書き方などを、訪問後にはお礼の手紙の書き方などを学び、最後に発表原稿やスライドを作成します。「ビジネスマナー」では、挨拶、名刺交換、電話、訪問のマナーなどを学びます。そして、学期末には、企業の方を招いてプレゼンテーションを行います。学生が主体となって発表会を開催し、評価も参加者全員で行います。日本からの大学生もこのプロジェクトに参加し、インタ

ビューの準備や企業訪問、発表準備などをシンガポールに来て対面で行ったり、オンラインで「協働学習」を行っています。教室で学んだことは全て実際場面で応用することになるため、学生の取り組みは真剣そのものです。しかしながら、日系企業は地元や外資系の企業に比べ、残業も多く待遇もよくないというイメージが強く、ビジネス日本語を履修する学生は限られており、せっかく学んだ日本語を将来に生かそうとする学生も多くはありません。そこで、最近では就職先を問わずグローバル人材として必要とされる異文化コミュニケーション能力や問題解決能力などの育成、チームワークやリーダーシップ強化のための学習の充実に力を入れています。



企業訪問プロジェクト発表会

5. シンガポール経営大学の日本語教育

Singapore Management University (シンガポール経営大学) では、初心者向けのコースのみが開講されています。更に日本語を学習したい学生は、交換留学先に日本の大学を選ぶことも可能です。限られた時間数で効果的に学習を進めるため、日本語クラスボランティアとして、日本語教育に経験や関心のある、当地在住日本人の方々にクラスに入って頂き、学習サポートを行って頂いています。学生からは「人数の多いクラスでも気軽に質問ができる」「会話練習をガイドしてもらえるのが良い」というフィードバックが多く、人気のシステムです。ボランティアの方々も、熱意と興味を持ってご参加くださり、その後、プロの日本語教師としてご活躍されるケースも少なくありません。また、履修

学生には最終学年の学生も多いため、日系企業に勤務する卒業生や、日系リクルート会社のスタッフによるキャリアトークを開催するなど、日本語学習を通してどのような可能性が開けるのか、学生に紹介する機会を設けるよう努めています。

6. 今後の課題

シンガポールは総人口が少ないため、日本語学習者数も多いわけではありません。また、到達できる日本語レベルも限られています。しかし、競争の激しい学習環境の中で日本語を選

び、熱心に学び続ける学習者が確実に育っているのも事実です。そのような学習者の学びを助けるため、限られた学習時間でも、学習者の持つ専門性と日本語学習で学んだことを将来いかに総合的に生かすかを考える力、継続的に学習していく意欲を育て、そのストラテジーを提示できる教育を探っていきたいと考えております。

注

- (1) シンガポールビジネス日本語国際大会 <<https://sites.google.com/site/bjgsg2015>> (2018年4月24日)
- (2) シンガポール日本語教育国際会議 2017<<https://sites.google.com/site/cabsg2017/>> (2018年4月24日)

参考文献

Walker, I. Ito, A. and Ishihara, E. (2018). What competence is necessary to be able to work in Japan-related workplaces? A survey of Singaporean business persons. In I. Walker, D. Chan, M. Nagami, & C. Bourguignon (Eds.), *New Perspectives on the Development of Communicative and Related Competence in Foreign Language Education*. Berlin: Walter de Gruyter.